



35

世界文学全集

人間の絆〈1〉

モーム／中野好夫訳

世界文学全集 35

人間の絆 I

サマセット・モーム

訳者 中野好夫

発行／1971年6月30日 7刷／1977年8月15日

発行者／佐藤亮一 東京都新宿区矢来町71

発行所／株式会社・新潮社 東京都新宿区矢来町71

電話東京(03)266-5111 振替東京4-808 郵便番号162

印刷所／株式会社光邦 製本所／新宿加藤製本所

本文用紙／三菱製紙株式会社

製函／文京紙器株式会社

函貼・扉・見返／特種製紙株式会社

表紙クロス／ダイニツク株式会社

乱丁・落丁本はお取替えいたします Printed in Japan 1971

目次

人間の絆

..... 3

サマセット・モーム

..... 583

Of Human Bondage
by
W. Somerset Maugham

人間の絆

くらい灰色の朝が明けた。雲が重くたれさがり、ひどく冷え冷えとして、雪にでもなりそうだった。子供の寢室に、乳母がはいって来て、窓のカーテンをあけた。彼女は向かいの、玄関のあるしつこい壁の家をちらと機械的にながめると、そのまま子供のベッドの方へやって来た。

「おめざでございますよ、ぼっちゃま。」

いいながら掛けぶとんをめくると、抱き上げて、階下へ降りた。子供はまだ半分寝ぼけている。

「おかあ様がお呼びでいらっしゃいますからね。」

階下の、とあるへやのとびらをあけると、女の寝ているベッドのそばへ彼をつれていった。母親だった。女は両手を伸ばした。子供は女のわきに寄り添うようにもぐりこんだ。なぜ起こされたのか、きいてはみなかった。女は彼の目にキスをする、やせた小さい手

を、彼の白いフランネルの寝衣の下にさしこんで、彼のあたたかいからだをなでまわした。そしてしっかりと抱きしめた。

「眠い、ぼうや？」

ひどく力のない声、なにかすでに遠い世界からでも聞こえてくるような声だった。子供は答えないで、ただ楽しそうに、ほほえんでみせた。大きな暖かいベッド、そして柔らかい腕に抱かれて、ひどく幸福だった。母親にしがみつくようにしながら、いっそうからだをちぢめるようにした。ウトウトとするような気持ちで、キスをかえた。と次の瞬間には、目を閉じて、はやくつり深い眠りに落ちていた。医者が来て、ベッドのわきに立った。

「どうか、もっとこうさせておいてくださいませんか？」
苦しそうに彼女はいった。

それには答えないで、医者はじつと真剣な顔で女の顔を見つめている。これ以上子供と一緒にいさせてもらうことはできないとあきらめると、彼女はもう一度彼にキスをした。それから、ずっと手を彼のからだぞいにずらせて、やがて両足まで来た。右足をつかん

で、五本の小さい足指をまさぐっていたが、やがてゆっくり左足にうつると、彼女はとつぜんすすり泣きをもらした。

「どうかしましたか？」医者はいった。「お疲れになつていらつしやるんです。」

物が言えないで、彼女は頭を振った。涙がほおを伝つて流れた。医者はのぞきこむようにして、

「私が、おとりしましょう。」

抵抗するだけの力もなかった。彼女は力なく子供を手渡した。それをまた医者は乳母の手に渡して、

「元どおりまたベッドにやすませておあげになるのがいいですね。」

「かしこまりました。」

眠ったまま、子供は連れてゆかれた。とたんに、母親は絶え入るようにすすり泣いた。

「どうなるんでしょう、ぼうやは？」

月ぎめの付き添い看護婦がしきりになぐさめた。そしてまもなく泣き疲れて、泣き声はやんだ。医者は、へやの他の一方にある机の方へ歩いて行つた。机の上には、タオルをかけた、死産の子供の遺骸が置かれて

いた。彼はタオルをかかげて、ながめた。彼の姿は衝立に隠れて、ベッドから見えなかったが、彼がなにをしているか、女にはわかつていた。

「女だったの、男だったの？」そつと小声で看護婦にきいた。

「またぼっちゃんでいらつしやいました。」

女は答えなかった。まもなく乳母が帰つて来て、ベッドのそばへきた。

「ぼっちゃまはどうとうお目ざめになりませんでした。」

ちよつと沈黙があつて、それから医者はもう一度患者の脈をとつた。

「いまのところべつに処置ありませんようですから、朝食後にもう一度出なおしましょう。」

「じゃ、ご案内致します。」と乳母がいった。

ふたりは黙々として階段を降りた。玄関で医者は足を止めた。

「奥様の義兄さんという方、もうお呼びになりましたでしょうか？」

「はい。」

「いつごろいらっしゃるか、おわかりでしょうか？」
「いいえ、実は電報を待ってるんですが。」
「それから、ぼっちさんのほうはどうなさるおつもり？ おられないほうがいいと思いますねえ。」
「ミス・ウオトキンが、お連れになるといいうお話なんですか？」
「ミス・ウオトキン？」
「ぼっちやまの名づけ親でいらっしゃいますの。いかがでしょう、奥様はよくおなりになるんでございませうか？」

医者は頭を振った。

2

一週間後だった。フィリップは、オンスロウ・ガードンズのミス・ウオトキンの家の客間の床にすわっていた。ひとりっ子だったので、ひとり遊びにはなれていた。へやの中は巨大な家具類が一ぱいで、長イスの

上には、どれにも大きなクッションが三つずつのっかっている。ひじ掛けイスにもそれぞれクッションが一つついている。それらを残らずかきあつめ、それに軽くて、動かしやすい、金塗りの軽便腰掛け台を動員すると、彼はおそろしく念入りの洞窟をつくりあげた。カーテンの陰にひそんでいるアメリカ・インディアンどもから身を隠そうというのだった。床にびったり耳をつけて、草原を駆け抜ける水牛の群れの足音に、耳をすませた。やがてとびらがあくと、見つからないように、じっと息をこらした。だが、だれかの手がおそろしい勢いでイスの一つを引いてとると、クッションがバラバラと落ちた。

「いけませんよ、ぼっちやま。ごらんなさい、ウオトキンおばさまがおしかりになりますよ。」

「ハロー、エマ！」

乳母は上からかがむようにキスをしてくれた。それからクッションのごみを払って、元の場所へかえした。

「もう帰るの？」

「ええ、お迎えにまいりましたのよ。」

「新しい服なんぞ着て、おめかししてるんだね。」

一八八五年のことで、彼女はスカートにしり当てをしてた。上衣は黒ビロードで、ピチンと腕のしまつたそで、肩は撫で肩になり、スカートには、大きなすそのひだ飾りが三つついている。これもビロードのひものついた、黒い婦人帽をかぶっていた。彼女はちょっとためらった。あてにしていたはずの質問が出なかった。したがって、せっかく用意していた答えをすることができなかったからだ。

「まあ、ぼっちゃまったら、ママさんのご病氣のこと、おききになりませんか？」とうとう彼女のほうから切り出した。

「ああ、忘れてたんだよ。ママどう？」

待ってましたというところだ。

「ママさんはね、もうすっかりおしあわせになつていらっしゃいますよ。」

「ぼく、うれしいなあ。」

「ええ、ママさんはもう行っておしまいになりましたの、もう二度とお会いになることはできませんのよ。」
フィリップには、彼女のことばがよくのみこめなかつた。

「なアゼ？」

「でも、もう天国にいらっしゃるんですもの。」
彼女は泣きだした。フィリップにはよくわからなかったが、なぜか一緒に泣けた。エマは背の高い、骨の太い、そして金髪で、顔の造作の大柄な女だった。ダービシアから来ていた。長いあいだロンドンへ奉公に出ているというのだが、ひどい発音のなまりはいっこうになおっていなかった。涙があふれると、感情のほうもいよいよ高まってくる。力一ぱい彼を胸に抱きしめた。この世界で唯一のものといつてもよい、いっさいの欲得を離れた愛情、それを奪われた子供に対するふびんさが、なにとはなしにこみ上げてくるのだった。見も知らぬ人たちの手に渡されるのかと思うと、たまらなかつた。だが、しばらくすると、やっと氣をとり直した。

「ウィリアムおじ様がいらして、お待ちになつていらつしゃいます。さ、ウォトキンおばさまに、さよならをおっしゃいませ、一緒におうちへ帰りましょうね。」
「いやだよ、さよならなんて。」なにか本能的に涙をか

くしたかったのだ。

「じゃ、ようございますから、二階へ行って、帽子をとっていらっしやいませ。」

彼は帽子をとってきた。降りてくると、エマは玄関のところで待っていた。食堂の奥の書斎で、人声がしていた。彼はちよつと足をとめた。ミス・ウォトキン姉妹が、友だちとなにか話をしているのだ。今はいって行けば、みんなきつと同情してくれるにちがいない。なにとはなしに彼には——その時九つだった——そんなふうに思えた。

「ぼく、行つて、おばさまにさよならいってくるよ。」

「ええ、そうなさいませ。」

「じゃ、ばあや、先にはいつて、そういつておくれ。」
なにかひどくおおぎょうにしたいような気持ちがあった。エマはとびらをノックしてはいつて行つた。彼女の声が聞こえた。

「ぼっちゃまが、さよならをおしやりたいと申しつていらっしやいますか。」

急に話し声がとだえた。フィリップはびっこをひきながらはいつて行つた。ヘンリエッタ・ウォトキン

は、赤い顔をして、髪を染めたがんじゃない女だった。そのころは、まだ髪を染めるということが、とかくの批評を受けるような時代であつた。したがつて彼女が髪を染めだした時には、家でいろんなうわさ話の出したことを、フィリップも聞いておぼえていた。彼女はひとりの姉と一緒に住んでいたが、姉のほうは、もうすっかり老いのままだにきらめて暮らしていた。ほかに、フィリップの知らない婦人がふたり来合せていたが、彼女たちは物めずらしそうに彼を見た。

「まあ、かわいそうに。」
「そういいながらミス・ウォトキンは両腕をひろげた。」

彼女は泣きだした。なぜ彼女が昼食に出て来なかったのか、なぜ黒い服を着ているのか、フィリップにもいまはじめてわけがわかつた。彼女は口もきけなかつた。

「ぼく、うちへ帰らなくちゃならないんです。」
とうとうフィリップがいつた。

やつと彼はミス・ウォトキンの腕の中から離れた。

彼女はもう一度キスをしてくれた。つぎには姉のところへ行つて、またさよならをいつた。客の婦人のひと

りのほうが、おばさんもキスしていいかときいた。彼はツンとすまして、ええ、いいですと答えた。泣きながらも、彼は、自分がいま原因になってひき起こしている感情の高まりに対して、ひそかな満足を感じていた。できることなら、もうしばらくいて、もっと珍重されたいような気もした。だが、みんなが待っていることを思うと、彼はエマが待ってますからといった。そしてへやを出た。エマは地下室へ降りて、だれか、そここの知りあいのもと話していた。彼は踊り場のところで待っていた。ヘンリエッタ・ウォトキンの声が聞こえた。

「あの子の母親というのが、私の大の親友でしてね。死なれたと思うと、私はもういても立ってもいられないんですの。」

「だから、ヘンリエッタ、あなたはお葬式に行っちゃいけないといったでしょう。きつとそんなことになるだろうと思ったから。」姉の声だった。

すると客のひとりの声で、

「かわいそうに、あの子が、たったひとりぼっちになるんだと思うと、どうでしょう、たまらないわね

え、それに、びっこじゃないの？」
「ええ、えび足なのよ。それが死んだおかあさんの、ほんとに頭痛の種だったのねえ。」
そのときエマが帰って来た。辻待ち馬車ハッセルを呼んで、彼女が御者に行き先をいった。

3

ミセス・ケアリの亡なくなった家——ケンジントンのノッティング・ヒル・ゲイトとハイ・ストリートとのあいだの、蕭条トウジョウとしたお屋敷町にあった——に帰り着くと、エマは先に立って客間にはいって行った。おじは贈られた花輪に対する礼状を書いていた。葬式におくれてついた花輪が一つ、ボール紙の箱にはいつて、大きな客間卓の上に置かれていた。

「はっちゃまでございます。」

ミスタ・ケアリはゆっくり立ち上がって、少年の手を握った。それから、ふとなにか思いなおしたよう

に、身をかがめて、彼の前額にキスをしてくれた。背
たけはいくらか中背以下、ふとり肉で、髪は長く伸ば
して、はげた頭を隠すように、きれいにくしを入れて
並べてあった。ひげはなかった。顔だちはよく整い、若
いときは、さぞよい男だったろうと思わせるようなふ
うであった。時計の鎖に黄金の十字架をつけていた。
「フィリップ、これからはおじさんの家で暮らすのだ
ぞ。どうだ、いやか？」

二年前、彼は水ぼうそうをやったあと、しばらくこ
のおじの牧師館へやられたことがあった。だが、記憶
に残っているものは、おじやお婆のことよりも、むし
ろ屋根べやや大きな庭のことばかりだった。

「いいえ。」

「だから、これからはな、このおじさんやルイザお婆
さんを、ほんとうのおとうさん、おかあさんのつもり
にならなくちゃいけない。」

少年の口もとには心持ちふるえた。顔が赤くなった。
だが、一言も答えなかった。

「私はおかあさんからおまえのことを頼まれたのだ。」
だが、そういう彼の心はけっしておだやかではな

った。義妹が重態だという知らせがあったとき、むろ
ん彼はただちにロンドンへと急いだ。だが、道々考え
たことは、もし彼女が死んで、その子供を引き取らな
ければならないというような仕儀に立ちいたった場
合、彼の生活に起こるであろう迷惑、ただそのことだ
けだった。もう五十をだいいふ越していたし、結婚生活
すでに三十年になる彼の妻には子供がなかった。おそ
らく騒々しくて乱暴な、男の子がひとり、急にとびこ
んでくることを考えると、予想はけっしてありがた
いものではなかった。それに彼は、義妹に対してけっ
して好感をもっていなかった。

「あしたブラックステイブルに連れて行くことになっ
ている。」

「エマも一緒なんですか？」

彼は片方の手をエマの手の中に入れた。エマはグツ
と強く握りしめた。

「いや、エマは家へ帰らなくちゃならない。」

「でも、ぼく、エマも一緒に来てほしいなあ。」

フィリップは泣きだした。エマもたまらなくなって
泣いた。しかたがないといった顔つきで、ミスタ・ケ

アリはふたりをながめていた。

「ちょっとのあいだ、これと私と、ふたりきりにさせてほしいんだがね。」

「かしこまりました、旦那様。」

フィリップはとりすがったが、彼女は静かに振りほどいた。ミスタ・ケアリは、彼をひざの上に抱きとると、片方の腕でかき抱くようにしていった。

「泣くんじゃない。おまえはもうおとなだ、ばあやについてもらう年じゃない。学校へ行くことを考えなくちゃなんのだ。」

「エマも一緒に来てほしいなあ。」彼はもう一度くりかえした。

「いや、それはお金がかかってしかたがない。いいか、フィリップ、おまえのおとうさんはな、お金をたくさん残していないのだ。どうなったものか、私にもわからん。だから、おまえは一銭のお金を使うのにも、気をつけなければいけないのだ。」

前日、ミスタ・ケアリは家政顧問弁護士をたずねて行ったのだった。フィリップの父親は、十分経験を積んだ外科医だったし、その病院の施設などから見て

も、もちろん財政的基礎は、ちゃんとりっぱにできているものとは思えなかった。それだけに彼が敗血病で急死したのち、妻に残した財産といえば、わずかに彼自身の生命保険金と、それにブルートン街の屋敷を貸し家に出して、それから上がる家賃以外には、ほとんど一文もないとわかったときは、意外だった。それが半年前のことだった。そのころすでに健康を害していたうえに、あまつさえ妊娠していることさえわかると、ミセス・ケアリは、もうすっかり前後の思慮を失ってしまった、なんでも最初にあつた借家希望の話を、いきなり渡りに舟と応諾してしまったのだった。

家具調度はよその倉庫に預けてしまい、とにかく子供の生まれるまでの急場しのぎという意味もあって、この義兄の牧師などから見れば、まったく法外とは思えない家賃で、ある家財つきの家を一軒、一年期限の約束で借りてしまった。だが、いままでいったい金の出し入れなどした女ではなく、一変した境遇に應じて、その出費を調節してゆくことなどは、てんでできなかった。やっと残っていた金も、なにやかやとみるみる指のあいだから抜け落ちていった。そしていまに

なって、いっさいの経費を清算してみると、将来子供が自活の道をたてられるときまで、彼の扶養費として残ったものは、二千ポンドをほんの多少出るだけのものにすぎなかった。といって、いまこんなことを、フィリップに説明して聞かしたところでしかたがない。彼はまだすすり泣いているのだ。

「じゃ、エマのところへ行っておいで。」この子供をうまくすかすには、どうもあの女のほかにはない、と彼はそう思ったのだ。

黙って、フィリップはおじのひざからすべり降りた。だが、ミスタ・ケアリはふたたび呼びとめると、

「あしたは行くんだよ、いいか。土曜日には、おじさんは説教のしたくをしなければならん。エマにいうんだよ、きょうじゅうにすっかり荷物のしたくをして置いておくれとな。おもちゃは全部持って行ってよろしい。それから、もしおとうさんやおかあさんの、なにか形見の品が欲しければ、おとうさんとおかあさんで、一つずつはよろしい。そのほかはみんな売り払うのだからな。」

子供は静かにへやを出て行った。ミスタ・ケアリ

は、いわゆる事務には不慣れだった。腹だたしいような気持ちで、ふたたび礼状書きにとりかかった。机の一方の端には、請求書の束がのっかっている。それを見ると、腹の底からイライラしてくるのだった。とりわけ、その一枚が業腹に思えた。ミセス・ケアリが息をひきとると、エマはただちに、死骸安置のへやを飾るのだといって、とほうもなくおびただし白い花を、花屋に注文したのだった。浪費以外のなにものでもない。いったいエマという女は、万事自分でひつかまえてやりすぎる。よし経済的窮乏ということがないにしても、おれならあんな女は即刻にお払い箱だ。

だが、フィリップはエマのところへ行くと、彼女の胸に顔をうずめて、まるで絶え入らんばかりに泣きつづけた。彼女のほうでも、まるで自分のほんとの子供のような気がして、——というのは生後一カ月のときから手しおにかけているのだった——しきりにやさしいことばでなぐさめた。ときどきは、きつとお目にかかりにうかがいます、けっして忘れはいたしませんから、と彼女は約束した。つきには、彼があす行く田舎のこと、それからデヴォンシアにある彼女自身の家の

こと——女の父親はエクセター街道の関門の番人をしているといふ話、家畜開いには豚がいるし、それに雌牛も一頭いて、いまそれがちょうど子供を一匹産んだといふ話、等々——いろんな話をしてやっているうちに、いつのまにかフィリップも涙を忘れて、やがて出る旅に心をはせて、小さい胸をおどらせていた。エマにもまだまだ仕事はあった。しばらくして降ろしてやると、彼は、乳母が彼の服をベッドの上にひろげるのを、一緒になって手伝った。それから彼女は、おもちゃを集めていらっしやいといふて、彼を、子供べやにやった。しばらく幸福そうに遊んでいた。

だが、とうとうひとり遊びにはたいくつして、寝室へ戻ってきた。そこではエマが、彼の持ち物を大きなブリキ箱に入れているところだった。彼は思いだした、そういうば、おじさんは、なにかおとうさんとおかあさんの記念になるものを持って行ってもいいといったはず。彼はそのことをエマに話して、なにがいいだろうときいてみた。

「じゃ、客間へいらして、なんでもぼっちゃまのお好きなものをごろんなさいませ。」

「でも、ウィリアムおじさんがいるよ。」
「かまいませんとも。いまじゃ、みんなぼっちゃまのものなんですよ。」

ゆっくりと階下へ降りてみると、客間のとびらが開いていた。ミスタ・ケアリは、どこかへ出て行っていない。フィリップはゆっくりと歩き回って見た。なにしろほんのしばらくしか住んでいない家だったの、特に興味をひくものとは、ほとんどなかった。いわばみもしらぬ他人のへやだった。気に入るものといつては、なに一つ見あたらなかった。だが、どれがおかあさんのものか、どれが家主の持ち物かは、彼にもよくわかっていた。しばらくながめていたあげく、彼は、いつかたしかおかあさんが好きだといった小さな時計に決めることにした。時計をもって、むしろ妙に寒々とした気持ちで、ふたたび二階へ上がった。母親の寝室の前までくると、ちょっと足をとめて、聞き耳をたてた。だれもはいつていけないといったものはないのだが、なにかそうしてはいけないような気がしていた。少しばかりこわいような気がして、胸が気味悪くどうきを打ったが、同時になにか知らな